小松帯刀とその時代
——特に「外国交際」の観点から——

根占献一

（一）幕末・明治維新期のイタリア人

日本と西欧との交流の歴史を振り返った時、一八五〇年代末からのおよそ四半世紀にわたる時の流れは、十六世紀半ばからの半世紀あまりに及ぶ時代とともに深い関心を呼び覚ます時期である。筆者はすでに古いほうの頃に関しては、すでに十年前に小著を刊行しただけに留まらず、その後も幾つかの拙文の類を明らかにしてきた[1]。これに引き換え、より新しい時代のほうは、かれこれ二十年前に一論文、「小松帯刀とカヴール—一八六〇年代の日伊関係」（Tatewaki Komatsu e Cavour. I rapporti italo-giapponesi negli anni 1860）を書き著しているに過ぎない[2]。

これは、英国のE・サトウ（Satow、薩道）やA・B・ミットフォード（Mittford）、プロイセンのマックス・フォン・ブラント（Max Von Brandt）、イタリアのV・F・アルミニョン（Arminjon）の回想録などから幕末・明治初期の外交を考察したものであった。論の狙いのひとつは、明治維新の立役者西郷隆盛がG・ガリバルディ（Garibaldi）に、大久保利通がO・ビスマルク（Bismarck）に準えられたのに対し、同じく薩摩藩の小松帯刀がC・B・カヴール（Cavour）と比定された明治期の古い文献、禰寝（ねじめ）直治「小松帯刀と明治維新」（一八九三年）を紹介することにあった[3]。

その後、ここ二、三年の間にかの時代の日伊交流の解明が進んで渇を癒してくれた。これにより旧稿以来、関心を寄せてきた初代イタリア王国特命全権公使ヴィットリオ・サリエ・ド・ラ・トゥール（Vittorio Sallier De La Tour）伯爵の仕事振りが鮮明になった[4]。同公使は、日本と修好通商条約を結んだ他国の利害と対立しうる外交活動は行なわないように、本国の歴代の外務大臣から指図された。彼が横浜港に着くのは一八六七年六月であるが、一月遅れて、領事クリストーフォロ・ロベッキ（Cristoforo Robecchi）が来朝した。ロベッキはド・ラ・トゥールが去り、次の公使が着任するまで代理公使を務めることにもなる。同行した書記官が病気がちで、やがて帰国したために、領事館で働いていたピエトロ・サヴィオ（Pietro Savio）が代理書記官として公使のために

も仕事をすることになった。公使館と領事館は横浜弁天にあり、フランス公使館に近かった。

フランス貴族出身で公使夫人マティルデ・サリエ・ド・ラ・トゥール（マティルド・リュイナール・ド・ブリモン）についてもまた、講演を聴く機会に恵まれた[5]。講演中に紹介された横浜を描く錦絵には馬を疾駆させる同夫人と覚しき女性も描かれ、当時の日本人は必ずや刮目したに違いない。講演の謳い文句は大体以下のとおりであった。――風雲急を告げる幕末、明治維新を目前にした一八六七年の横浜に滞在したイタリア人たち。そのうちのひとり、先のサヴィオは、領事館と公使館で働き、のちに蚕種商人として活動した。一八六九年にはイタリア人一行による養蚕地帯調査旅行に加わり、それをまとめた日本内陸旅行記は日伊交流史の重要な基礎資料となった。一方、マティルデは初代公使の妻として公私に多忙な日々をおくった。ふたりは滞在中の生活での体験や見聞を日記に書き残している、と。

講演はこうして、いままで未公開だった彼らの日記（マティルデのほうはフランス語文）の抜粋を写真や絵などの画像とともに取り上げて、一八六八年前後の日本の世相と外国人居留地のあった横浜におけるイタリア人の生活振りを明らかにしてくれた。なお、ド・ラ・トゥール夫妻も参加した調査旅行を伝えるサヴィオの書は学習院女子大大学図書館に収蔵されている[6]。作者サヴィオは本書の題扉にアレッサンドリア出身とある。講演者は、この北伊都市での調査については成果がなかったと振り返った。

イタリアにとってなぜ養蚕業が重要であったかについては後述するなかで歴史的に見てみたい。ド・ラ・トゥール伯爵に継ぐ、公使アレッサンドロ・フェ・ドスティアーニ（Alessandro Fé d' Ostiani）伯爵の外交活動（一八七〇年十月三十日来日）には治外法権撤廃に関わる点があり、注目される。それは日本国内での蚕種買い付けに必要な内地旅行を可能にするべく、日本に裁判管轄権を譲渡しようとしたからであった[7]。

（二）小松帯刀の史的立場

さらに、拙文「小松帯刀とカヴール」発表後、平朝臣小松帯刀清廉（一八三五―七〇）関連文献も増え、幕末に関する各種の知を得ることができるに至った。これにより小松の行動もより詳細に知られるようになった。幾つかの研究書を検討したい。

島津斉彬の死去（一八五八年）後の緊迫した十年間が刻々と変化するなか、佐々木克は関与者が私考を変えていく様子を浮かび上がらせる[8]。ただその学的関心は小松にはなく、必ずしも彼の像は明瞭にならない。むしろ岩下佐次右衛門方

平の史的位置づけは明解である。誠忠組（精忠組とも）に属しながらも、家格の高かった岩下方平はのちに家老のひとりともなった。パリ万国博覧会での活躍でも知られる岩下は、帰国後は直ちに京に上って王政復古のクーデター（洋暦一八六八年一月三日。和暦慶応三年十二月九日）に加わった。新政府では西郷、大久保とともに参与に任じられた。

岩下は、私には小松が晩年健康を害した時に彼に代わるように活躍した人物とも映ずる。小松は王政復古の政変時には病気で鹿児島に残らざるを得なかった。大政奉還に際して小松が果たした役割とは大きく異なるが、その間は二ヶ月もない。健康は本人にしか分からない面があって難しい扱いになるが、小松はこのまま地元薩摩で生を終えたのではない。本文で述べるように、鳥羽・伏見の戦い後に上洛しているのである。政変を企図した際に藩内で何かがあったのではないかと憶測を呼ぶ所以である。

時に問題となる、小松が土佐藩の後藤象二郎や坂本龍馬のような大政奉還派（ひいては公議政体派となろうか）であったか、あるいは大久保利通、特に西郷隆盛のような武力討幕派であったかに関しては、佐々木は高崎猪太郎に関わる箇所で述べる。「当時の在京土佐藩首脳は、京都薩摩藩邸内で意見が分かれていて、小松帯刀は『挙兵』反対論者であるかのようにみていたが、小松、西郷、大久保の三者の関係を熟知していない、外部の誤った観測である」と註する[9]。高崎は西郷、大久保の政変志向に慎重な態度を取り、この頃土佐藩に出入りしていた薩摩藩士である。

この問題については芳即正も同意見であろう。芳はそもそも両派間にある小松という書き方をせず、討幕の出兵と密勅の箇所では小松に一重点を置いて叙述する。兵を出すことには京都でも鹿児島でも強い反対意見があり、小松はこれに反論しなければならなかったというのが、芳の考えである[10]。

小松の態度をもっとも明言し、裁断しているのは井上勲であろう。少々長いが引用してみよう。「（慶応三年）十月十四日（陽暦十一月九日）、招命によって二条城に登城した小松は、大政奉還に賛意を示し一刻も早い実行を促した。また、摂政二条斉敬のもとに赴いて入説もした。このことから、小松帯刀は、しばしば、武力討幕論と大政奉還論との間を動揺していたとの評をうけることがある。けれども、そのように断定することはできない。小松の心理は詳らかにしないけれど、行動は西郷（隆盛）・大久保（利通）と協議し決定した方針にしたがっていて、武力討幕の戦略にそっている。幕府ならびに朝廷と交渉した者が何ゆえに小松であったかといえば、京にある薩摩藩士のなかで、もっとも家格が高かったからである。幕府は重臣の登城を求めた。そして薩摩藩の重臣は、まず小松帯刀だったからである。[11]」

だが、単に地位だけの問題だったわけではないし、そのうえ「小松の心理は詳らかに」されなければならない。渋沢栄一が、小松は芸州藩の辻将曹とともに「討幕派同志の間」で「やや旗色の鮮明ならざる者」[12]と指摘している点は無視できない。さらにもうひとりがいる。貴族階級出身の英国外交官、先のミットフォード（一八三七年生。リーズデイル男爵）は、後藤象二郎によれば小松は武力抗争なしに必要な政府の改革ができると考えた、有能な人物であった[13]と報告する。朝幕双方で信任厚い小松は、武力行使貫徹という考えでは少なくともなかったろう。小松と同時代を生きた渋沢（一八四〇年生）と後藤（一八三八年生）の言は重い。

藩の重鎮たる小松が新政府でいかなる場を占め、活動しえたかが問われなければならない。王政復古後、小松は上洛したのみならず、江戸（東京）にも再び姿を見せるのである。

（三）英仏の対日関係と『英策論』

専門研究者、佐々木、芳、井上、三者に共通する分析批判的手法に対し、同じ日時を扱いながら総合解釈的接近を図って詳細を極めるのは、歴史家萩原延壽の長編『遠い崖――アーネスト・サトウ日記抄』である。副題が内容を表わしていない嫌いがあるものの、悠揚迫らぬ平明な文体で、一次史料に語らせる手法は社会が滔々たる動きをしているなかで、あの時代の時間の刻み方のように進んでいく様を醸し出す[14]。

シャルル・ド・モンブランの来日（長崎到着慶応三年九月二十二日、陽暦十月十九日）、そして蒸気船キャンスー号の薩摩藩購入に際してのこのフランス人の介在は、大政奉還、そして王政復古の政変と同時並行の出来事である。彼は節操に欠ける危険人物と見なされていたが、パリ万博では薩摩藩を代表する岩下方平と親しくなっていた。キャンスー号（英国製造）は春日丸と改名され、早速、薩摩藩主島津忠義らが徳川幕府に最後の鉄槌を下すべく京に上がった折に使用された、艦船の一艘となる。萩原によれば、この洋船はそれまで薩摩が購入したいずれよりも巨大でかつ速力も早く、幕末の薩摩海軍に一大戦力を加えることとなる[15]。「外国交際」は明白に内政と国内問題に関わり、この時期の日本は外交抜きには判然としない時代といえよう。

また『遠い崖』は、外国関係者が問題の時期における日本の国家のあり方に相当に大きな影響を与えていたことを教える一書である。駐日フランス公使レオン・ロッシュ（Léon Roches）の場合、明らかに祖国のナポレオン三世とその統治を徳川最後のふたりの将軍に重ね合わせる思考方法は容易であったろう。ロッシュは統治者として慶喜にはフランス皇帝のイメージを説いたのである。慶喜がこのフランス人を、あるいはさらにナポレオン一世をどの程度思い描いたかは興

味深い問題である。萩原は、このような幕府擁護一辺倒のロッシュと「幕府と討幕派との双方にたいしてたえず接触の通路を確保」する英国の駐日公使ハリー・パークスとの顕著な違いを、彼らの母国の政治体制の異同に存する可能性を示唆する。さらに書いている。「幕末の最後の日々において、討幕派のあいだに武力倒幕論という、一種の『一元論』が登場したとき、パークスなどがこれにたいしてしめした危惧を思いあわせると、これは記憶しておいてよいことかもしれない。」[16]

そのパークスの部下、文久二年（一八六二年）秋に来日したサトウ（一八四三—一九二九）の『英国策論』は反徳川幕府派の人々に広範で強力な影響を及ぼした。これは、一八六六年三月十六日から五月十九日にかけて三回にわたって横浜の週間新聞『ジャパン・タイムズ』（チャールズ・リッカビー発行）に無題・無署名で発表され、後に「英国策論」として知られることになる。この英文論説は、徳島藩士沼田虎三郎の助けを借りながら、サトウ自身によって翻訳されて阿波侯に供された。その後翻訳の写本は各地に流布され、さらに慶応三～四年には『英国策論』の題で印刷され、大坂や京都の書店で販売されてよく読まれた。吉良芳恵によれば、「この論説は、天皇（Majesty）を元首とする諸大名の連合体が支配権力の座につくべきだと主張するサトウ個人の非公式な見解であったが、イギリスの対日政策を代弁するものと受けとられ、討幕派に注目された[17]」のである。

アーネスト・サトウの『英国策論』は日本の真の代表、元首が誰であるかを問うている[18]。そのために、この問題は、天皇との関係で将軍はいかなる敬称でしか言い表せないか、という英国外交官の切実な「外国交際」と関わる。彼らにとり、将軍は「殿下」（His Highness）であっても、決して「陛下」（His Majesty）にはならない。これに対し、ヨーロッパに駐在する外国奉行向山一履（隼人正）は徳川慶喜側に立って、英国外相スタンレーに抗議を行なうであろう[19]。向山を支援するロッシュの国のナポレオン三世は権力を奪取した統治者であった。『英国策論』に「日本史學家ノ著述ニアルコトク往古ハ大君の威權全ク強カリシ」[20]と書くサトウのようには、ロッシュは日本の歴史を遡及して天皇の地位を考えることはなかったであろう。この大君は徳川将軍に条約締結の際に用いられたが、これは僭称であるという。「シヤウクント云語ハ英吉利語ニテ譯スルモカタカラサルニ将軍ハ外國有司共ト結ヒシ條約ニ己ノ本官ヨリ尊貴ナル大君ノ號ヲ以テ調印セリ」[21]。

『英国策論』写本の一点に国立公文書館内閣文庫（岩倉具視関係文書）蔵の「薩摩藩某翻訳」があり[22]、小松との関係から重要である。その冒頭は小松と覚しき人物の体験[23]が素

地にあることを窺わせるもので、注目に値する。そして小松が重職に就くその薩摩藩が、この英国に数多くの留学生を送り出したことが想起されるべきであろう。分けても小松との関係では松木弘安（寺島宗則。初代駐英公使）や五代友厚（大阪商工会議所初代会頭）が重要である[24]。ふたりはともに薩英戦争で英艦の捕虜となった経験がある。また、スコットランド出身の貿易業者T・B・グラヴァーと彼らや小松ら、同藩士との密接な関係も周知の事実である[25]。サトウは、その書などに見られるように疑いもなく反徳川の倒幕派に与していて、上司のパークス公使とはかなり態度を異にしていた。時には辛辣な上司批判を書き付けた。

若いが、眼識鋭い、このようなサトウから小松帯刀は高い評価を受けた。「外国交際」のなかで、以下の話は小松を讃えるサトウの一文であり、サトウらしいシニカルなユーモアも見られる。「小松は私の知っている日本人の中で一番魅力のある人物で、家老の家柄だが、そういう階級の人間に似合わず、政治的な才能があり、態度が人にすぐれ、それに友情が厚く、そんな点で人々に傑出していた。肌の色もきれいであったが、口の大きさが美貌をじゃましていた。[26]」このあとサトウは小松がうまそうにビールを飲み、パテ・ド・フォワ・グラをぱくつき、上機嫌だったと述懐している。吉井幸輔（友実）も一緒であった。飲食する時の小松の口の動きが印象的であったのであろう。翌日もサトウはミットフォードとともに両人を薩摩の大坂蔵屋敷に訪ねている（一八六七年）。そしてそこには松木もいた[27]。

サトウとミットフォードの最初の滞日（各一八六二～一八六九、一八六六～一八七〇）は奇しくも小松の充実した活動期間と合致し、示唆するところ大である。サトウは後年、「あの一八六二年から一八六九年にかけての時代は、私の人生で最も活気に満ちた時代でした。あの頃は私は本当に生きていました。今はただ無為に時を過ごしているような気がします」[28]と書くであろう。激変する転換期に遭遇する体験は滅多にあることではないからである。

（四）日本と普・伊間の条約

先述のイタリア王国特命全権公使夫妻の来日はフィレンツェにまだ同国の首都（一八六五―七〇）があった頃で、一八六七年のことである。一八六一年にサルデーニャ王国は都を最初トリノに構え、サヴォイア家の出身者が引き続いて王となり、イタリア王国と国名を一新して建国を宣言していた。一族の信任厚い宰相カヴールが推し進めたリソルジメント（国家統一運動）は、ガリバルディによる下からの運動に支えられて、ローマに向けて着実な歩みを続行中であった。

このような遷都は、幕末日本でも京都から大坂への首都移

転が持ち上がることを考えると興味深い。日本の場合、大阪に移ることなく江戸へ移転し、東京となる。そこは徳川政権の本場であり、イタリアは古代と教皇庁の中心地ローマへ変わる。パークスは、王政復古に伴う徳川慶喜隠棲後に江戸が政治的な意味では大君の没落と運命をともにするが、重要な商業都市に生まれ変わる可能性を示唆している[29]。

ところで、江戸時代末期を国際関係の中で捉えた大塚武松の先駆的業績[30]でも、また石井孝の浩瀚な研究書[31]でも、米・英・仏・蘭に比べ、かなり遅れて徳川幕府との交渉に入ったイタリアが独自の外交を展開した様子は見られない。これらの著書では当然のように、それら四カ国、米・英・仏・蘭の動向、特に英・仏の政治的思惑と駆け引きに力点が置かれているだけである。これは当時イタリアが占めていた国際的地位に関係していた。後述するように、この新興国家は、リソルジメントと同様に日本との「外国交際」においても当初はフランスを頼りにしていた。新興国家足らんとする点ではプロイセンも同様であった。このドイツの一国はドイツ全土を統一する直前であり、イタリアよりも早く日本を訪れ、イタリアよりも自覚的で積極的な外交を展開していたように思われる。

一八五八年、安政五年、米、蘭、露、英、仏の順にこの五カ国と条約が結ばれた[32]。これにより、周知のように、一八九九年（明治三十二年）の治外法権撤廃[33]と一九一一年（明治四十四年）の関税自主権獲得に至るまで、日本政府はこの安政の条約と苦闘することになる。これに続いた西欧諸国はプロイセン（孛漏生）、スイス（瑞西）、ベルギー（白耳義）、イタリア（伊［以］太利亜）、デンマーク（丁抹）であった。この五カ国に続いたプロイセンとイタリアに限って経緯を述べよう。

プロイセン代表オイレンブルク（Eulenburg）は江戸幕府より一プロイセン王の代理者として遇されようとしたが、彼自身は関税同盟全体の名のもとに条約が結ばれることを希望した。複雑なドイツの政治状況は幕府側に、特に全権のひとり堀織部生に戸惑いを与えずにはおかなかった。「独逸聯邦の組織を知らず、又其使節の権限如何をも審にせず、ただ孛漏生一国の使節とのみ信ぜし時なりしかば、織部生はひたすら欺騙せられたりと思惟して、いたく此事を慚恨し、責を引きて自殺せしなり。[34]」一八六一年一月二十四日（万延元年十二月十四日）に調印、一八六四年一月二十一日（文久三年十二月十三日）に批准交換が行なわれた。

オイレンブルクの滞日中、通訳を務め、締結談判に活躍したヒュースケンを襲撃する事件が起きた。この出来事は横浜開港後に頻発した一連の外国人殺傷事件のひとつであり、これ以前には三田斉海寺のフランス代理公使旗番でイタリア人

のナタルが負傷していた。老中安藤対馬守信正はヒュースケンの遭難を哀悼して、次のように述べた。「いまや排外思想全国に満ち、国歩艱難の際に当り、事情を外人に通じてわずかに交誼を破らしめざるものは、訳官の力なり。然るに今此老練なるヒュースケンを失ひたるは、独りヒュースケンの不幸のみにあらずして、実に日本の不幸なり。幕府は直接には外人保護の任を闕き、間接には日・米・両国の交情を繋ぐべき人を失へり。されば余が憂苦は決して足下が僚友を失へるに譲らざるなり。[35]」この言にハリスは感動を覚え、また老中の政治的労苦を慮った。

次にイタリアに関しては少し詳しく条約過程を見ておこう。先の安政条約は当事国ばかりでなく、第三国にも多大の影響を及ぼしつつあった。同条約締結以後、イタリアの場合には国内の伝統的基幹産業である絹糸工業が清国のほか日本から輸出される生糸に圧倒され始める。加えて、一八四〇年代後半あたりから流行し猛威を振るっていた蚕の病気、微粒子病（pebrina）は、繭の生産量を半減させ、事態を悪化させていた。一方で、国を開いた日本はイタリア産業に救いをもたらす可能性を秘めていた。なぜなら、中近東や清国から来る蚕卵（蚕種。semi bachi）に代わって日本産蚕卵こそが気候と大気の悪影響に対して抵抗性が強い、と確認されていたからであった。微粒子病の未感染地域に足を伸ばす蚕種商人（semaio）たちは、こうしてついに幕末の日本に辿り着いたのである。

それ故、日伊関係は、本腰を入れて政治交渉のために外交官が来朝する以前に、北イタリアのロンバルディア地方や、サルデーニャ王国の中心地、ピエモンテ地方の養蚕家や養蚕商人たちが蚕卵紙購入のために人を派遣したことに始まるのである。[36] 横浜に来た彼らがフランスの保護下にあったことは、リソルジメント頃の同国との関係を考えると当然のところであろう。

しかし、正式な外交関係の成立は欧米主要国に先を越されていたイタリアにとり、産業的内情と相まって切実に望まれるところであった。そのような折、横浜鎖港談判使節池田長発、河津祐邦らの一行がパリに滞在中であった。[37] フランス駐在のイタリア公使ニグラは彼らに通商条約締結のために日本へ使節を派遣したいと申し出た。これが外交の直接的交渉の始まりであった。イタリア王国誕生三年後の一八六四年のことである。

交渉の続行は軍艦マジェンタ号の艦長に任命されたアルミニョンに委ねられた。翌六五年（慶応元年）、アルミニョンは同じくパリで幕府使節団外国奉行柴田日向守剛中と会見し、次のように述べた。「マジェンタ号の派遣は我が通商の利益のために決定されたのであって、伊太利亜国は日本に聊

かの混乱をも齎すことを欲しないのである。我々は友達として暮すことを望んでいる。我々は印度に植民地など領有せず、今回の企ても決して侵略的野心に依って為されるものではない。我々は両国の産物を自由に交換することを欲するのみである。大君（タイクーン）の定めた掟は、一の文明国が数百年の伝統に依って作った所のものであるから、我々は充分之を尊重する考えである。蚕卵に就いては、日本の経済状態が輸出を可能するだけの額を以て、我々は充分満足するであろう。[38]」

インドは一八五七年のセポイの反乱を期に英国の決定的な植民地になっていた。このインドの出来事と一八六四年清朝下での太平天国滅亡は、アジアへの西欧列強の侵略の事例として、幕末の日本人にもよく知られていた。幕府側も反幕府側も対立が内乱になれば、日本もまた植民地化されると考える人は多かった。勝海舟もその一人であった[39]。アルミニヨンは将来の日本を予想して次のように言っている。「機械的技術が優れているというので、日本人は『東洋の英吉利人』だと言った人がいる。然しこの比較はその他の点、殊に精神的方面に於ては適当ではない。日本は極東の他の国々に対して永続的制覇を保持することは先ず有るまいと思われる。事実、太閤様の子孫は朝鮮の占領地をも保有することが出来なかったのである。[40]」

幕府が英・米・仏・蘭四カ国と輸出入の改税約書を定めた直後の一八六六年（慶応二年）、アルミニヨンが来日した。彼と柴田日向守、朝日奈甲斐守、牛込忠左衛門との間で、八月二十五日（陰暦七月十六日）日伊修好仮条約が結ばれ、翌年の伊公使来任を待って本条約が締結される運びとなった。滞日中アルミニヨンはフランス公使ロッシュの力を借りている点が注目される。離伊中、母国は普墺戦争にプロイセン側に与して参戦し、結果としてヴェネツィアを併合している。この当時の首府がフィレンツェだったのである。

（五）日本、伊、仏、普の動向

アルミニヨンの回想記にはフランス寄りの姿勢が明瞭であるが、彼が来日した年には本国では一連の世俗主義に貫かれた法案が議会で採択され、反教皇主義が高まっていた。それは紛れもなくローマに向けられたものであった。そしてローマの背後にはフランス第二帝政があり、ナポレオン三世はローマ教皇ピオ九世（在位一八四六-七八）との間にその世俗権を擁護する誓いを立てていた。新興イタリア王国は教皇による世俗支配権限を奪取する必要があった。

既出のように、誕生間もないこの国家が送り込んだ、初めての特命全権公使がド・ラ・トゥールだった。彼は一八六七年六月二六日（慶応三年五月二四日）に着任し、十月三日（九月六日）に批准交換を終了した。この年、本国ではガリ

バルディ派によるローマ併合の試みが改めて行なわれたが、フランスも再び軍隊を派遣してこの動きを握りつぶしてしまった。王国政府がフィレンツェ遷都をローマへの一里塚と見なしていたのなら、この永遠の都への道程を阻むフランスは敵以外の何ものでもなかったであろう。ド・ラ・トゥール全権公使は、もはや所謂九月協定が信じられたアルミニヨンとは異なった対仏観を抱かざるを得なかった[41]。

興味深いことに、徳川昭武（清水民部大輔）の使節団一行がこの年、イタリアを訪問中であった。慶喜の実弟、昭武は王国の首府フィレンツェで、十月二四日、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世に謁見した。かつてはメディチ家、ついでハプスブルクのロレーナ家が住まったピッティ宮殿には今もなおサヴォイア家の玉座が置いてある。山高信離、田辺太一、渋沢栄一、それに既出の向山一履（初代駐仏公使）らからなる昭武一行が離日したのは前年のことで、長州再挙はままならず、徳川幕府の権威はさらに翳りを増していた年であった。

同年（慶応二年七月二十日）将軍家茂は若くして大阪城で病死する。将軍死去しておよそ四ヵ月後に一橋慶喜は最後の将軍職に就く。この将軍たちは完全に京阪に釘付けされ、政治の中心が移動していることを示している[42]。家茂は一八六三年（文久三年）朝命を受け、三代将軍家光以来の上洛を行なっていた。その間、流れた年月は二百三十年間である。上洛中のこの家茂と小松帯刀はさしで会った。藩の重政を担う家老であることを第十四代将軍が評価したためである[43]。

弟は兄の名代として、パリで開催（一八六七年四月一日～十一月三日）の万国博覧会に参列すべく、困難な情勢の最中日本を発ち、四月十一日（陰暦三月七日）にパリに到着した。ここで徳川宗家が主権を保持していることを誇示しなければならなかった。薩摩藩があたかも独立国家のようにこれに参加し、ここで振舞っていた話は有名である。同藩は幕府使節よりも二ヶ月ほど早くパリ入りを果たしていた。昭武の訪問国としては、そのようなフランスが主たる目的先であったといえようが、条約締結国、英・白・蘭・普・丁・魯・瑞西・伊を歴訪することも大事な外交日程に組み込まれていた。またこの国で彼は五年間勉学に励むことになっていた。その教育に当たるのはメルメ・ド・カション（和春）で、日本の仏公使館勤務の経験もある聖職者出身者であった[44]。

だが、余り時を置かずに幕府が倒れ、昭武らは帰路を余儀なくされよう[45]。彼らばかりではない。一行を追うように渡仏し、ド・カションと出会った栗本鋤雲もこの悲報をパリで知った幕臣の一人であった。第一回フランス留学生に選抜された、少年緒方維直も慶応三年に渡ったばかりであったが、明治元年に一旦帰国する。十年後、彼は二十五歳の時ヴェネ

ツィアで客死するであろう[46]。朝廷問題に振り回された最後の将軍慶喜とその側近たちが産業・軍事方面だけでなく、文化導入に努めていることは歴史的に評価されるべきである。それはまさに薩長に対抗して幕府維持を図ろうとする凄まじい努力のように映ずる。徳川政権倒壊後、新政府のもとでこれらは初めて急発進したのではなかった。

アルミニョン来朝からド・ラ・トゥール赴任までの間に、イタリアも日本も歴史がさらに大きく動いていた。このために後任者は前任者の時と異なり、フランスに歩調を合わせて幕府一辺倒というわけには行かなくなっていた。京都の朝廷との関係に力を注ぐ必要が高まり、江戸・横浜だけでなく、大坂・京都、そして兵庫方面にも関心を向ける時代に突入していた。

この時フランス公使はロッシュであった。積極的に慶喜を支援した外交官として知られる。彼は当時の用語に従えば「尊幕派」であった。先の昭武らの各国訪問もこのロションの思惑に負うところが大きいであろう。公使着任は一八六四年（元治元年）四月。ことごとに反目し対立することになる英国の公使パークスよりも一年早く赴任し、滞日は四年あまりとなる。後任はアンジュ・ジョルジュ・マキシム・ウトレイ（Ange George Maxime Outrey）で、アレクサンドリア総領事からの転進であった。実は日本に来る前、ロッシュもまたイスラム圏で仕事をした。総領事兼代理公使を務めたチュニスはその前任地であった。それは非常に長い期間に及び、このために彼の著書は『イスラム世界三十二年』（*Trente-deux ans à travers l' Islam*, Paris, 1887, 2 vols.）という。こうして、彼ら二人のフランス公使の「オリエンタリズム」が問われて良いかもしれないが、ここでは先を急がなくてはならない。

ロッシュが来日してから二年半後、一八六六年九月に本国では外相が交代した。新外相は前任者のような対日積極政策はとらず、駐日公使の政策を冒険主義と見る一方で、対英協調の方針をとった[47]。大政奉還後のフランス新聞各紙はしかし、同国の対日政策を非難した。慶喜がロッシュの助言に従っていたら、「メキシコの破局」が日本でも再現されることになっていたろうと、ナポレオン三世のメキシコ干渉の失態を想起する有様であった[48]。また対独関係についていえば、六七年、同皇帝がルクセンブルクを購入しようとしてプロイセンとの間が緊迫化する、所謂ルクセンブルク問題が生じている。この試みはビスマルクに妨害され、普仏関係は悪化した。

本論の冒頭で述べたように、プロイセンの公使はフォン・ブラントであり、ド・ラ・トゥールとは親交を結んだ[49]。日本が新たな国家形態を模索していたように、両国も新たな統

一国家に向かって歩み続けていた。この頃のドイツは刻々と事態が推移する。フォン・ブラントの肩書きが最初はプロイセンの代理公使、次いで北ドイツ連邦の代理公使兼総領事、普仏戦争後はドイツ帝国の弁理公使となっていったのは、その証左であろう。一八七〇年に勃発した同戦争におけるプロイセンの勝利はドイツ統一の仕上げとなるであろう。イタリア側から眺めると、普仏戦争でのドイツの戦勝はフランス軍の撤退により待望のローマ占領が容易になり、統一をほぼ完成に至らしめる、価値あるいくさであった。ここで首府もフィレンツェからローマに移るであろう。

プロイセンの動向は遠い日本でも注目されていた。西郷吉之助（隆盛）もこの普仏両国の戦闘がわが国に都合がよいと見ていた。統一の過程での北ドイツ連邦のような在り方は、伊藤俊輔（博文）によれば、強い国家になるために克服されなければならなかった[50]。日本もまたこの連邦のような形で分裂していれば、強大な国を造ることができないのである。幕臣の老中稲葉正邦も「独一連合州」の形態は日本に不適格と判断していて[51]、立場が異なる両者間に相違はない。

（六）徳川慶喜と諸外国

一八六七年大晦日、ド・ラ・トゥールはフォン・ブラントとともに横浜より蒸気商船で大坂に入り、寺町通りの大きな寺院の離れ屋に宿泊した。イタリア公使が繰り返し本国外務省に依頼していた軍艦は、この時点では到着の見通しが立っていなかった。年が明けて蘭総領事が着坂し、英・仏・米・伊・普（孛）・蘭の六ヶ国が揃った。その目的は兵庫開港・大坂開市に備えることにあった。

兵庫開港は、一八五八年（安政五年）に幕府と諸外国のあいだで結ばれた修好通商条約に基づく懸案のうち、最後の難関と目されていた。それは幕府と薩摩のあいだで激越な政治的駆け引きの様相を呈していた。幕府は開港して対外的な約束を守らなければならなかったが、勅許なしに従前の港のように開港することはもはや困難な状況となっていた。薩摩を筆頭とする反徳川勢力は、外交上の失政として幕府領地内の幾つかの開港を取り上げ、これで経済的に潤ったのは徳川のみであると非難した。また国家主権は徳川将軍になく、天皇のもとで条約を結びなおす必要があると主張していた。これはサトウの『英国策論』の信念と一致していた。一八六七年四月二三日（慶応三年三月十九日）には大久保一蔵（利通）などの懸命な努力が功を奏して、兵庫開港不許可の御沙汰書が慶喜に下っていた[52]。

しかし慶喜は勅許を得ることはできなかったものの、上奏を諦めなかった。諸外国の代表には一八六八年一月一日（慶応三年十二月七日）の開港と開市を実行に移すことを約束し

たし[53]、このため半年前の陽暦七月七日（六月六日）を期して、兵庫・大坂・江戸などの開港と開市を行なうことを全国に布告していた。慶喜の力強い行動力と彼の個人的魅力は、フランスに限らず英国を始めとする外国政府の代表にも好印象を与えていた。これらは彼らのあいだに徳川政権への信頼度を高めさせ、大坂に彼らが参集したのもそのためであった。

ところが、一月三日（十二月九日）、西郷の指揮する五藩（薩摩・土佐・芸州・尾張・越前）の兵が皇居を包囲するなか天皇は王政復古の大号令を発した。前日の午後から宮中で摂政二条斉敬が主宰する朝議が開かれ、三日早朝に長州藩主父子の赦免等が決定を見るや、岩倉具視、大久保一蔵、そして西郷たちによるクーデターが実行に移され、王政復古宣言が発せられたのである。従来の官職、関白・伝奏・議奏を廃して惣裁（総裁）・議定・参与の三職が置かれる。最初の三職会議が三日夜から翌四日の早朝にかけて宮中の小御所で開催され、慶喜の辞官・納地、官位の辞退と領地の奉納を命ずることが決められた。慶喜は将軍職ほか、内大臣を追われ、二百万石の所領返上を求められる[54]。この勅旨は四日のうちに二条城で彼に伝えられた。この間、朝廷では親幕派二条斉敬が解任されていた。

政変は外国の代表にも伝えられた。慶喜がひそかに二条城を脱出し、大坂に向かったのは六日の夜であった。八日大坂城でフランスのロッシュ、英国のパークスの謁見が行なわれた。この数日間の出来事を元将軍は説明し、このふたりの公使の意見を聴いた。大政を奉還し、列藩会議に託した将軍の行動を称えた[55]。九日、外交団はプロイセンの公使館に参集して中立宣言起草に取り組み、正文が渡された。十日午後三時、今度は外国使臣全員との謁見が御白書院で行なわれた。慶喜はド・ラ・トゥール伊公使とフォン・ブラント普（孛）代理公使を初めて引見する。彼は自ら、先ず己の政策を説き、次に京都からの撤退理由を弁じ、最後に列藩会議の決定に従う意向を闡明にした。公使団の質問に対して、政治体制が不明な現状では自分が外交事務を担当する、即ち、外交は旧幕府が処理する、と明言した[56]。これは公使たちに非常な安堵感を与えた。慶喜は無論、王政復古のクーデターが数名の諸侯による策略と批判することを忘れなかった[57]。

鳥羽・伏見の戦いは同じ月の二七日（慶応四年一月三日）に始まった。これは、一八六九年（明治二年）箱館（函館）五稜郭の戦いで榎本武揚らが降伏するまで続く内戦、戊辰戦争の幕開けとなった[58]。幕府は初戦で敗れ、三〇日夜（一月六日）慶喜は大坂を脱して、翌早暁軍艦開陽丸で江戸へ去る。追われる将軍はこのフリゲート艦に乗る前に、一旦アメリカのイロクォイ号に乗船した。これにはアメリカ公使ファルケ

ンバーグの理解と協力があったのであろう[59]。外交団も剣呑な大坂を離れて、翌月初め兵庫に難を避けることになる。この時、ド・ラ・トゥール公使やロベッキ領事は他の外交官たちとともにアメリカ軍艦で出航した。イタリアの軍艦クロティルデ女王号（Principessa Clotilde）が横浜に来るのは漸くこの年の十二月である。

（七）小松帯刀と外国交際

大政奉還の際の小松の活躍については諸伝が伝えるところだが[60]、奉還後からこの間、小松はどうしていたのか。西郷、大久保を伴い、倒幕の密勅を持って、中途山口で藩主毛利親子と密談、この後、薩摩に帰り、島津久光と藩主忠義（茂久）に経緯を報告した。慶応三年十一月十三日に上洛を目指して当地を発つことが決まり、クーデターに備えて、山内容堂を説得するべく土佐に寄る運びとなっていた。だが、体の不調を訴え、これを大久保一蔵に代役してもらい、鹿児島に残った。このため後藤象二郎には書簡を認め、西郷、大久保とうまく打ち合わせて事を運ぶようにと願った[61]。姿を見せぬ小松に土佐藩の有力者たちは健康面でなく、別の理由があるのではないかと訝るむきもあったという。

小松に限らず、この時代の人々が概して病気で動けない、したがって失礼するという場面が多いのに気づく。このような例は久光にもあるし、大久保にもある。先に書いたように、健康のことは本人にしか分からないのでなんとも言えない点がある。他者が入り込めない領域なので、受け入れるしかない面がある。必ずしも丈夫な身体ではなかった小松帯刀であるだけに、実際に歩行困難な病、脚気に襲われたのかもしれない。

しかしながら、このあと、慶応四年（一八六八年）一月十八日、徴士参与に任じられ、鹿児島から上洛、総裁局顧問となる。これは鳥羽・伏見の戦いで官軍が勝利を収めたあとのことである。続いて小松は外交担当、外国事務局判事を兼務する。外交は旧幕府が処理する、と慶喜が言明している以上、新政府の責もまた大きかったろう。腕が試される。そこに備前事件（神戸事件）、堺事件、パークス、サトウ、ミットフォードら参内襲撃事件などが次々に起こった。この外交上の難題を、東久世通禧、伊達宗城らとともに小松は解決していく。同じ薩摩藩の臣下たち、吉井、それに英語に堪能な五代と寺島、また陸奥陽之助らは彼をよく補佐した[62]。これら諸事件と小松関係資料は既に先行論文で扱ったので、ここでは繰り返さないが[63]、それらはまるで彼の関西帰りを待っていたかのように出来している。

関西だけではない。サトウの日記や「海舟日記」から小松が関東に来、江戸高輪の薩摩藩邸に入って焦眉の仕事に取り

組んでいることが分かる。陰暦六月十五日（八月三日）のことである。この時点では徳川処分が発表されていたが、内戦は奥羽と北越に拡大していた。さらに海舟とサトウの日記には七月八、九日（八月二十五、二十六日）にそれぞれ新政府の実力者となった小松への言及があり、サトウによれば、「勝は小松に会ったあとだったので、機嫌がよかった」とある。幕臣の勝は王政復古以前から小松と親しかったが、御一新後も関係は変わっていなかったのである。「小松帯刀来訪。天下の形勢、并びに八州の情実、外国の交渉を談ず」[64]、と。擬洋風建築の傑作、時好に投じる築地ホテル館が出来上がりつつあり[65]、また江戸が東京と名を改め、明治と改元される日も間近の頃の話である。

サトウの日記は小松への言及を止めない。一八六九年一月十三日（陰暦十二月一日）に記す。「池辺（五位、永益。会計官判事）によると、御門は今月の十七日か十八日に京都へ向けて出発するそうである。そして、御門は十二月（陰暦）初旬に出発、春にふたたび江戸にもどる旨をつたえる告示が、すでに出されたそうである。[66]」このように東京に行幸していた天皇に、一月四日、イタリアのド・ラ・トゥール公使は初めて謁見し、ようやく信任状を奉呈した[67]。公使は誰が日本の真の支配者か迷い続けたが、幕府が完全崩壊するまで将軍がこの国の公認された唯一の代表と信じ続け、この日に至ったのである[68]。五日に接見された英国はすでに半年ばかり前に大坂で提出済みであった。この両日、そのほかの国として仏・蘭・米・普が謁見を済ました。サトウは続ける。「池辺は、宇和島侯（伊達宗城）と小松（帯刀）が大使としてイギリスへ派遣されることになり、そのためにふたりは百日の休暇をあたえられたというはなしをきいたが、真偽のほどは不明だという。[69]」

小松の病が重くなった時、オランダ人の著名な医師ボードウィンは同道してヨーロッパで治療を受けさせたいと言ったと、一八六九（明治二）年十二月の大久保宛の小松の書簡が残っている。春になれば、薬の効果もあるかと思い、洋行は急がないというのである[70]。事情が許せば、三年ほど前にパリ万国博覧会行きを小松は考えていた。「野夫ニも是非渡海之事申立候得共願達之向ニ無之誠ニ残念之至ニ御座候[71]」。健康の悪化に驚く。

最後に彼とキリスト教の関係に触れておきたい。宣教団体であるパリ外国宣教会のフランス人司祭、プティジャンによる日本の「カクレキリシタンの発見」、「キリシタンの復活」は同じく幕末の出来事であった。そして明治新政府は旧幕府から他の諸問題と同様、浦上のキリシタン問題を引き継いだ。新政府でこの問題に関わったひとりが小松帯刀であった[72]。小松の場合、占める立場上、政治・外交・産業・法律・文化

などあらゆる分野に深い関わりがあり、こと宗教も例外ではない。ただし完成したり、解決したりするために残された時間が彼には少なかったのである。

にもかかわらず、ここでも小松の物腰が充分に窺えるのではないかと思われる件が、サトウの日記（一八六八年八月二十一日、陰暦七月四日）に書き記されている。これを引用して結びとしたい。「中井（弘蔵、弘）はキリスト教の問題について、小松が京都におくった手紙の草稿も見せてくれたが、そこにはサー・ハリー（パークス）の意見が紹介してあって、小松も同じような穏健な措置を支持していた。[73]」

註

1 『東西ルネサンスの邂逅―南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』、東信堂、一九九八年。近年のひとつに「若きザビルとイタリア・ルネサンス」、『ソフィア』二一六号、二〇〇五年冬季、第五十四巻第四号、十―十五（四二四―二九）頁。

2 『日伊文化研究』第二六号（一九八八年）、四三―五四頁。この学術誌の編集委員会によりイタリア語題名の一部はintorno al 1860と印刷されてしまったが、ここでは訂正した。なおモノグラフィではないが、次の拙稿は一部、該当時代を扱う。「イタリア人の訪問者・熟知者と日本――鹿児島調査旅行覚書より」、『学習院女子大学紀要』第七号（二〇〇五年）、二五―四二、特に二九―三一頁。

3 根占「小松帯刀とカヴール」、五〇―五二頁。「小松帯刀と明治維新」については、註二五に挙げた『鹿児島県資料集』第二一集の『小松公之記事』参照。なお禰寝（根占）宗家の小松への名字改姓の経緯に関しては、次の論文を参照のこと。林匡「「小松」改号一件――近世祢寝氏の系譜意識と島津吉貴」、『黎明館調査研究報告』第二〇集（二〇〇七年）、一―二六頁。

4 G・A・ベルテッリ（Bertelli）「未刊史料に見る初代駐日イタリア公使・領事の活動」、『イタリア学会誌』第五七号（二〇〇七年）、一二四―一六五頁。この論文は養蚕に関する情報も多い。

5 テレーザ・チャッパローニ・ラ・ロッカ（Teresa Ciapparoni La Rocca）「一八六七年　横浜のイタリア人――ピエトロ・サヴィオとマティルデ・サリエ・ド・ラ・トゥールの日記」（二〇〇八年十一月二七日、東京、イタリア文化会館）。

6 *La prima spedizione italiana nell'interno del Giappone e nei centri servicoli effettuatasi nel mese di giugno dell'anno 1869 da Sua Eccellenza il conte De La Tour : racconto particolareggiato del viaggio e delle nozioni speciali ottenute, sull'allevamento dei bachi non meno che sulla coltivazione e sul prodotto del suolo giapponese con 44 incisioni e la carta geografica del Giappone*, seconda edizione, Milano, Fratelli Treves, Editori, 1873. 第二版であるが、NACSIS Web Siteでは当館のみである。初版からの岩倉翔子訳が存する。『就実女子大学史学論集』第二一号（二〇〇六）、六九―一二二頁。また、岩倉翔子「十九世紀日伊交流の一側面―ピエトロ・サヴィオの『旅行記』をめぐって」、『イタリア図書』第三七号（二〇〇七年）、二―七、特に、三、六頁参照。それは三版を重ねたとある。他方で、サヴィオは一八七四年に再来日を果たして再度旅行を敢行し、新たに旅行記を公刊した、と。吉浦盛純『日伊文化史考――十九世紀イタリアの日本研究』、イタリア書房、一九六九年、一六四―八一頁。

7 ベルテッリ「日伊蚕種貿易関係における駐日イタリア全権公使の役割（一八六七―一八七七）」、『イタリア図書』第三七号（二〇〇七年）、十九―二七頁。この論文は、ド・ラ・トゥールと異なる性格を持っ

たフェ・ドスティアーニの外交を明らかにする。治外法権と内地旅行の関連性については、萩原延壽『遠い崖——アーネスト・サトウ日記抄』、朝日新聞社、第十巻「大分裂」、二〇〇八年、八六—九九、一〇八、一三一—三四頁。

8 『幕末政治と薩摩藩』、吉川弘文館、二〇〇四年。

9 同書、四二七頁註七五。

10 『島津久光と明治維新——久光はなぜ、討幕を決意したか』、新人物往来社、二〇〇二年、一九一—九二、一九六—二〇一頁。

11 『王政復古——慶応三年十二月九日の政変』、中央公論社、一九九一年、二三〇頁。

12 『徳川慶喜伝』、平凡社東洋文庫、一九九八（一九六八）年、第四巻、七三頁。

13 一八六七年十二月二二日付、駐日公使パークスよりスタンレー外相への報告、同年十二月二九日付、附属文書。これは萩原、前掲書、第六巻「大政奉還」、二〇〇七年、五九頁の引用による。ミットフォードの略歴は萩原、同書、第八巻「帰国」、二〇〇八年、七一頁参照。近作とは言い難いが、毛利敏彦『大久保利通』、中央公論社、一九八八（一九六九）年、一一二—一五頁では、後藤の大政奉還に対する薩摩藩の有力メンバーの動向が画然と描かれる一方で、小松は常に、この著書の主人公大久保に寄り添う影に過ぎないようにしか名が出ない。それだけではない。「大久保は、上級士進歩派の小松帯刀を味方にひきいれ、藩政首脳におくりこんだ」（同書、二八頁）とさえ記される。「おくりこむ」ことが大久保のような身分の者に果して可能であったか疑問だが、彼の「使い走り」をするだけの存在ではなかったことは明白である。

14 二〇〇七～〇八年、全十四巻。これは今では文庫本化（朝日文庫、朝日新聞社）されている。一次史料がふんだんに引用され、本文作成にこの上なく役立った。

15 『遠い崖』、第六巻、八六頁。

16 『遠い崖』、第四巻「慶喜登場」、二〇〇七年、三五一—五三頁。特に三五三頁。権威と権力が分たれている英国と比較しながら叙述している。当時の英国はヴィクトリア女王の時代であり、「君臨すれども統治せず」とされた。私見では、教皇庁と戦うイタリア王国も欧米の使臣には影響を及ぼしていた。これについては根占「小松帯刀とカヴール」四八頁。目下のところ、これが当時の日本にいかなる影響を与えたかは確認できていないけれども。

17 『アーネスト・サトウ著作集　第二期　新聞記事・雑誌論文集成別冊付録　英国策論』、Edition Synapse, 二〇〇一年、二頁。『図説アーネスト・サトウ　幕末維新のイギリス外交官』、横浜開港資料館編、有隣堂、二〇〇一年、四六—七頁には「外交官サトウの誕生——『英国策論』の威力」と題され、写真掲載とともにこの編集に携わった吉良による解説がつく。収録写真の多くはヴェネツィア出身の名高い報道写真家フェリーチェ・ベアトの撮影になる。

18 サトウが『英国策論』でこの問題の口火を切ったことについては、萩原『遠い崖』、第五巻「外国交際」、二〇〇七年、十八頁。

19 萩原、同書、第四巻、四一四—十七頁。

20 英國士官ストウ（まま）著『英国策論全』（慶応三年刊版本）復刻版、四一頁（この数字は復刻版に特に打たれたものである）。パークスの「思い出」を書いたバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）は、「もっとも迂遠に思える学問上の事実でも、時に実際政治の上で効力を発揮することがありうる」として続ける。「その良い例が、サトウ氏による古来の日本の史書の研究である。日本の正統な主権者は『将軍』ではないという『御門（みかど）』の立場をサー・ハリーが支持したのは、まさにこの研究が提供した理由によるもの

である」、と。これは萩原『遠い崖』、第十一巻「北京交渉」、九七頁からの引用による。

21 『英国策論全』、五一頁。

22 これは上記の復刻版の前に合本されている。五―二八頁がそれに相当し、題名自体は『策論』で作者は「英國士官サトウ著」とある。

23 その体験とは、ガウアーよりヴァイスへの書簡、一八六二年九月五日付、ニールよりラッセル外相への報告、同年九月十四付に同封、と萩原『遠い崖』、第一巻「旅立ち」、二〇〇七年、三五三―五五頁、に引用されているものである。間違いなく小松が該当人物とすれば、これは彼の活動を知りうる、かなり初期の史料となるであろう。

24 宮本又次『五代友厚伝』、有斐閣、一九八一年、二一八頁、によれば、五代は西郷らの武勲派との関係が殆ど見出されないという。「武勲派の人々は御一新における武功を誇り、それに直接参加しなかった諸士と相容れず、それを排斥する傾向があった。中央政府にて徴士となった文勲派を嫉視し、在朝者は帰藩せよと帰国をうながしていた。」

25 小松については、往古作として『小松帯刀伝・薩藩小松帯刀伝・履歴小松公之記事』『鹿児島県資料集』第二一集、一九八〇年。この『小松帯刀伝』は坂田長愛の編となっている。『小松帯刀日記』『鹿児島県資料集』第二二集、一九八一年。近年では、瀬野富吉『幻の宰相小松帯刀伝』（改訂版）、小松帯刀顕彰会、一九九一年。旧稿（註2参照）後に公刊されたのは、原口泉『龍馬を超えた男小松帯刀』グラフ社、二〇〇八年。

26 根占、前掲論文、四七頁。Earnest Mason Satow, *A Diplomat in Japan*, Bristol 1998 (1921), p. 188. サトウ『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳、岩波文庫、（上）、一九八六（一九六〇）年、二三七―三八頁。ここでは訳文をいくらか変更した。これと全く対照的に見下すように批判されているのは、土佐の山内下総である。萩原『遠い崖』、第五巻、三二三頁参照。

27 この件はサトウの日記でも同じで、萩原『遠い崖』、第四巻、二四〇頁に引用されている。同席していたミットフォードも覚書を残していて、同様に歴史的に意義深い内容を有する。それは、萩原、同書、二四九―五七頁、に詳しい。I・C・ラックストン『アーネスト・サトウの生涯――その日記と手紙より』長岡祥三・関口英男訳、雄松堂出版、二〇〇三年、はこの箇所を全く取り上げていない。またその書に吉井の名は出るが、小松の名は見出されない。

28 一八九三年十一月二日付のF・V・ディキンズ宛書簡。同書、九一頁の引用による。萩原、前掲書、第十巻、一五二頁、でも引用されている。ミットフォードも同様の感慨を抱きはしなかったろうか。彼らの友人で医官でもあったウイリアム・ウイリスは、公使館と領事館の「黄金時代」と回顧するであろう。これに関しては、同書、三七四―七五頁。

29 萩原『遠い崖』、第七巻、八七頁、ハモンド外務次官あて半公信一八六八年五月二日。さらに同書、第六巻、二八七頁（大坂に遷移される可能性についての伊達宗城の言）。同書、第七巻、二二六頁（江戸が望ましいとするパークスの言）、二三四頁（江戸こそ相応しいとの井上石見の言）。

30 『幕末外交史の研究』、宝文館、一九五二年。

31 『明治維新の国際的環境』、吉川弘文館、一九五七年。これは後に増訂版が出ているが、ここでは初版から引用した。

32 この安政五年はひとつの歴史的転換時のように思われる。この年、肝付尚五郎は小松家養嗣子となり、島津斉彬が死去して薩摩藩は転換期を迎える。また安政五年の密勅の史的意義については、田中惣五郎『最後の将軍徳川慶喜』、中央公論社、一九九七年、五〇―二頁。

これは安政の大獄の近因となる。

33 前註7参照。

34 鈴木大日記。擬雲随筆。開国始末。幕末外交談。懐往事談。匏庵遺稿。渋沢栄一『徳川慶喜伝』、東洋文庫、平凡社、一九六七（一九九八）年、第一巻、二八二頁、の引用による。

35 渋沢、同書、二七四頁。

36 V.F. Arminjon, *Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta nel 1866*, Genova, 1869.『伊国使節アルミニョン幕末日本記』松崎実編、田沼利男訳、一九四三年、三、三一六頁。永井三明「幕末・明治期の日伊交渉」、『幕末・明治期における日伊交流』、日本放送出版協会、一九八四年、二〇—六、特に二〇頁。

37 大塚、前掲書、七〇頁以下参照。

38 『伊国使節アルミニョン幕末日本記』、七—八頁。吉浦、前掲書、一四五—五三頁、に外交交渉の経緯が交易とともに述べられている。

39 萩原、前掲書、第七巻、十八頁。

40 『伊国使節アルミニョン幕末日本記』、七七頁。引用文中の「日本人は『東洋の英吉利人』」という言い回しは、『米欧回覧実記』第二編英吉利国ノ部第二十一巻英吉利国総説にある「此国ノ人ハ、毎(つね)ニ日本ヲ東洋ノ英国ト謂フ」とは前提が違っていて興味深い。こちらでは、地形、国土面積、人口のことなどからそのように言っているのである。久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』田中彰校注、岩波書店、一九八八（一九七八）年、(二)、一二頁。

41 G. Procacci, *Storia degli italiani*, vol.II, Bari, pp. 396—97. プロカッチ『イタリア人民の歴史』豊下楢彦訳、未来社、一九八四年、II、一五五—五六頁。

42 萩原、前掲書、第四巻、二五〇頁。ミットフォードの「覚書」によれば、将軍（家茂）が上洛し、天皇に忠誠を誓ったときから、ある種の革命がおこった。『英国策論』には「大君天子ノ命ヲ以テ上洛セシメラレシヨリ其威權大挫ケリ」とある。同書、四五頁。国立公文書館内閣文庫（岩倉具視関係文書）蔵の「薩摩藩某翻訳」では、十六頁。前註二〇、二二にこれらの刊行本と写本について言及した。

43 原口、前掲書、二〇一—〇二頁。

44 萩原、前掲書、第五巻、一七一頁。この人物もド・モンブラン同様、萩原によれば問題が多かった。同氏は全般的にフランス関係者に厳しい見方をしているように思われる。富田仁・西堀昭『日本とフランス——出会いと交流』、三修社、一九七九年、一四七—五六頁、に示されるように、フランス語普及に果たした役割は無論のこと、『養蚕秘録』の一事だけでもカションは重要であろう。但馬の養蚕家、上垣伊兵衛守国の手になる『養蚕秘録』（一六〇八年）はイタリア人のイジドロ・デッローロが幕末にイタリア語に訳し、それがさらにフランス語にL・N・ペクールによって重訳された。ペクールはロッシュへの敬意のためにこれを訳出したという。なおカションは、来日中のアルミニョンのために一仕事を行なった。

45 水戸徳川家相続問題も絡むというのは、渋澤栄一「仏蘭西時代の思ひ出」、尾佐竹猛『幕末遣外使節物語』、講談社学術文庫、一九八九年、二七〇—七八頁所収、特に二七六—七八頁。萩原、前掲書、第七巻「江戸開城」、二〇〇八年、二三七—三八頁。

46 富田仁・西堀昭、前掲書、一〇一—〇三頁。

47 石井、前掲書、五九八—六〇〇頁。

48 萩原、前掲書、第七巻、一九六頁。

49 根占「小松帯刀とカヴール」、五〇頁。

50 西郷、伊藤の例はそれぞれ萩原、前掲書、第五巻、二七八頁、第六巻、二一五頁。

51 同書、第四巻、一七〇頁。

52 同書、一五六、二四六、三八〇頁。
53 同書、第五巻、十九頁。
54 同書、第六巻、一一一、一二三頁。
55 同書、一二五頁。
56 大塚、前掲書、二七九頁。尾佐竹猛『国際法より見たる幕末外交物語』、邦光堂、一九三〇年、五九頁。なおこの時の慶喜の敬称についてのミットフォードの見解は、根占、前掲論文、四六頁。前註一八、一九参照。
57 萩原、前掲書、第六巻、一二九、二五二頁。
58 いわば「内戦」状態に入った場合の局外中立の問題は、根占、前掲論文、四六―七頁。萩原、同書、第六巻、二〇五―〇六頁。中立宣言の崩れ始めは、萩原、同書、第七巻、三四七頁。
59 萩原、同書、第六巻、一六六―六九頁。甲鉄艦ストーンウォールの注文など、米と幕府の親密な関係は、根占、前掲論文、四八頁。
60 坂田長愛編『小松帯刀伝』、禰寝直治「小松帯刀と明治維新」などを参照。これらの文献は前註三、二五参照。
61 坂田『小松帯刀伝』、四一―二頁。高橋裕文「武力倒幕方針をめぐる薩摩藩内反対派の動向」、『もうひとつの明治維新』（家近良樹編）、有志舎、二〇〇七年、二三〇―六〇頁、は揺れ動く小松の態度に言及する。
62 この時代には数多の人物が数々の物事に関わり、対処してゆく様が顕著で、そのエネルギーたるや、凄まじいものがある。このためプロソポグラフィー的手法で各自に等しく照明を向け、統合的に理解してゆく姿勢が肝要ではないか。
63 根占、前掲論文、四七―八頁。神戸事件の関係者、瀧善三郎の衝撃的な切腹場面に立ち会ったのはド・ラ・トゥールでなく、サヴィオだった。ベルテッリ、前掲論文（註4参照）、一五五頁註六八。
64 萩原、前掲書、第七巻、二二三、二三七頁。「海舟日記」、慶応四年七月八日、『勝海舟全集』（勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編）、勁草書房、一九七三年、第十九巻、八九頁。
65 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』、日本放送出版協会、一九七七年、二五―六頁。なおこの書では、小松に関わる鹿児島の尚古集成館、長崎の小菅ドックも言及されている。同書、六四―九頁。
66 萩原、前掲書、第八巻、十三頁。
67 根占、前掲論文、四八頁。
68 ベルテッリ「未刊史料に見る初代駐日イタリア公使・領事の活動」、一三五頁。同「日伊蚕種貿易関係における駐日イタリア全権公使の役割（一八六七―一八七七）」二〇頁、では、来日後、日本の情勢を把握したド・ラ・トゥールは天皇に出すべきではと思いもしたが、本国の外務大臣の指示により将軍への提出を考えている中で時が流れて行ったという。
69 萩原、前掲書、第八巻、十三―四頁。
70 桐野作人「さつま人国誌」六十五、南日本新聞、二〇〇八年七月五日。この連載はまた、小松の死因が肺結核でないかと教示する。根拠は明治二年十二月八日付け、桂久武の小松宛見舞い状（「小松氏書類写」、『石室秘稿』所収）である。
71 原口、前掲書、一七九頁、からの引用による。書簡は慶応二年（一八六六年）八月十六日大久保宛。
72 H・チースリク監修、太田淑子編『日本史小百科　キリシタン』、東京堂出版、一九九九年、二九九頁。
73 萩原、前掲書、第七巻、二三四頁、からの引用による。さらに同書、一〇三―〇四、三五〇頁、第五巻、二五三―五四頁参照。パークスの宗教観が知られる。

付記。この小論を草するに当たっては、鹿児島県歴史資料センター黎明館（鹿児島市）の黒川智世氏からの資料送付や情報案内に与った。記して心からお礼を申し上げる。なお、本論文は「平成十九年度学習院女子大学特別研究費（共同研究）」による成果の一部である。

（本学教授）